

# 第59号

発行日：平成23年12月16日  
発行者：医学研究科広報委員会  
印刷：やまと印刷株式会社

弘前大学大学院医学研究科・医学部医学科広報紙

## 医学部ウォーカー

- 1面：医学研究科長・医学部長寄稿
- 2面：弘前大学東洋医学研究会発足
- 3面：ハーバード大学留学体験記
- 4面：「地域医療入門」ワークショップ報告
- 5面：研究室紹介 脳神経内科学講座
- 6～7面：留学だより
- 8面：東医体結果・人事異動

題字 弘前大学長 遠藤正彦氏筆

医学研究科長・医学部長寄稿

### ノースサイド

医学研究科長・医学部長 佐藤 敬



野田総理大臣が、民主党代表に選ばれた日だったと記憶していますが、記者会見で「ノースサイドにしましょう」と言われました。これはラグビーで用いられる言葉であり、多くのスポーツの中で、試合終了を「ノースサイド」と言うのはラグビー以外には、寡聞にして知りません。ラグビーのように体のぶつかり合いが中心となるような競技では、「ノースサイド」に徹する意識が根底になければ、単なる格闘になってしまふ恐れがあるためだという見方もあるようですが、私自身の経験から言うと、格闘のつもりでプレーしているうちはラグビー選手としては未熟です。それはともかく、激しい戦いが終わった後に、敵も味方もなく、お互いに健闘を讃えあうことは、ラグビーの最も美しい瞬間にほかなりません。（その他には、美しい点はほとんどありませんが。）

ラグビーに限らず、さらには、民主党代表選のような人事に限らず、「ノースサイド」の精神はきわめて重要で、大きな組織になればなるほど、その中には多

様な考え方があつて、親しみを感ぜながら各号の隅々まで読んできたと言えそうです。今振り返ってみると、「ノースサイド」を徹底するためには、さまざまな情報や考え方を皆で共有することはきわめて重要であり、その点で「医学部ウォーカー」が果たしてきた役割も大きいと思います。その意味では、「医学部ウォーカー」は単なる新聞のようなものではないと認識しています。「医学部ウォーカー」の今後がいかなるものになったとしても、組織としての情報や考え方を皆で共有するとともに、「ノースサイド」の精神に徹して組織の運営に当たっていくことは続けられなければならないと思います。

「医学部ウォーカー」は五十九号を数えました。十周年の時にも書きましたが、私は「医学部ウォーカー」の創刊から関わって

### 第13回 弘前国際医学フォーラム

泌尿器科学講座・先進移植再生医学講座

教授 大山 力

平成二十三年九月九日、第十三回弘前国際医学フォーラムが開催されました。今回のテーマは「Innovation in Transplant and Regenerative Medicine」とし、近年著しい進歩を遂げている移植再生医療の最先端の話題に焦点をあてました。一般演題は十七題の

発表があり、参加者は百二名でした。シンポジウム、ポスターセッション共に活発な討議が繰り広げられ、盛況のうちに今回の国際フォーラムが終了しましたことに深く感謝申し上げます。シンポジウムは本学皮膚科学講座出身の大阪大学教



授 玉井克人先生の講演から始まりました。玉井先生には皮膚の再生医療に関する最先端の情報をご提供いただき、続いて名古屋大学の山本徳則先生には脂肪組織由来幹細胞を利用した腎臓再生という非常に魅力的な講演を頂きました。本学でも、脂肪組織由来幹細胞を簡単に分離・採取可能な研究機器を導入しましたので、今後、医学研究科においてもこの領域の研究が活発になるものと期待されます。

今回の国際フォーラムは時間の関係で、昼休みにポスターセッションを組み入れ、「ランチョンポスターセッション」という形式を採用しました。軽食をつまみながらのポスターディスプレイは参加者が分散せず、効率的に議論が可能でした。また、昼休みを利

用してポスターを見ることが可能でしたので、企画としてはまずまずの出来栄であったと思っております。

午後のシンポジウムはUCSFのChris E. Freese教授の臓器移植の話題に始まり、秋田大学の佐藤滋教授には免疫抑制剤の血中濃度が薬物代謝酵素のSNPsによって影響を受けることとお話頂きました。第一線でご活躍中の先生方のお話で、説得力と迫力に満ちたご講演を堪能させて頂きました。

最後のセッションは臓器移植領域の世界的権威の先生お二人にお願いしました。まず、ABO血液型不適合腎移植を自ら開拓、確立された新潟大学の高橋公太教授にはABO血液型不適合腎移植の歴史と問題点についてお話を頂きました。

今回のシンポジウムは文部科学省特別教育研究事業「免疫学的不適合臓器移植の拡大に向けた基礎的・応用的研究」の研究グループが主体となり企画・運営致しました。また、青森医学振興会をはじめ多くの皆様から貴重な御支援を賜りまして、この場をお借りして御礼を申し上げます。

### ハンガリー医科大学生臨床実習

学務委員長 奥村 謙  
(循環呼吸器内科学講座 教授)

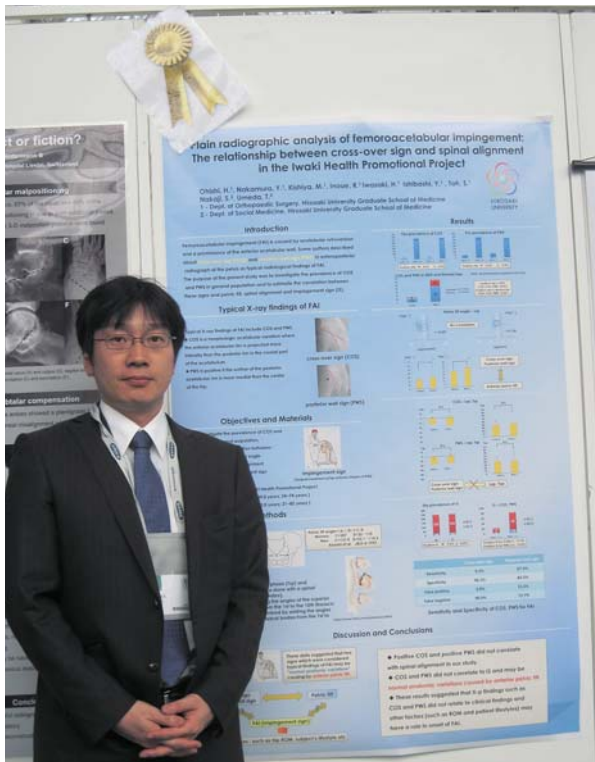
平成二十二年度より開始されたハンガリー医科大学受託実習生（臨床実習）の受け入れも今回で二回目となった。本制度は、日本の高校を卒業後、ハンガリー国の四医科大学（セメルワイス大学、セゲド大学、ペーチ大学、デブレツェン大学）に進学、医学を学ん

でいる日本人学生に医学部附属病院で臨床実習の場を提供することを目的とする。昨年は三年次学生五名が内科実習を行ったが、本年度は七月四日より七月二十九日までの四週間、三年次学生四名が内科実習を、四年次学生二名が外科実習を行った。日本と異なり欧米では九月から新学期が始まるが、三年次の七月は三年次カリキュラム終了直後であり、従って四年次進学直前といえる。同様に四年次学生は五年次進学直前の時期に相当する。三年次学生の四名（男性二名、女性二名）は、消化器血液内科、循環呼吸器臓器内科、内分泌代謝内科、腫瘍内科から二科を選択し、前後半の各二週間で実習を行った。四年次の二名は胸部心臓血管外科と消化器外科を二週間ずつ交代で実習を行った。四年次の一名は、昨年弘前大学で内科実習を行った学生である。

ハンガリー医科大学の日本人学生は何らかの事情で日本の大学医学部に進学せず、ハンガリーで医学を学んでいる。医学は英語で、日常生活はハンガリー語で、というハンディを背負いながら勉強しているだけに、医学に対するモチベーションは高く、弘前大学学生よりも学年としては一年後輩にあたるが、内科、外科の知識レベルは決して遜色ないように思われた。実

(次ページへ続く)





# Jacques Duparc Award 受賞報告

附属病院整形外科 助教 大 石 裕 誉

平成二十三年六月一日からデンマークの首都コペンハーゲンで行われた12th EFORT (European Federation of National Associations of Orthopaedics and Traumatology) congress 2011にて優秀ポスター賞(Jacques Duparc Award)を受賞致しましたので、ご報告致します。演題名は「Plain radiographic analysis of femoroacetabular impingement — the relationship between cross-over sign, spinal alignment, and impingement sign in the Iwaki Health Promotional Project」です。本学会では最後に、本研究を行うにあたり御指導いただきましたました整形外科科学講座の藤哲教授、石橋恭之准教授、中村吉秀講師、社会医学講座の中路重之教授、梅田孝准教授に感謝申し上げます。なお本研究は文部科学省、厚生労働省の各科学研究費および日本整形外科学会プロジェクト研究の支援を受けました。この場を借りて御礼申し上げます。

(前ページより)  
習態度は概ね良好で、日本の大学医学部附属病院で、日本の医学・医療を学んだことに大きな意義を見出して欲しいと思う。彼らがハンガリー医科大学を卒業後、どのような進路を選択するか分からないが、恐らくほとんどは日本の医師国家試験を受験し、日本で医療活動に従事することになるだろう。青森県という医

師不足を背景に有する地域で日本の医療に接したことで、わが国の医療の現状を多少とも理解できればとも期待している。  
最後になったが、弘前大学五年次BSL学生に加え、ハンガリーの三年次、四年次学生の実習を受け入れていただいた内科、外科の各教授、臨床実習担当の先生方に感謝申し上げます。

十五題あり、best 10 posterが今回の awards に選出されました。  
私の研究は変形性股関節症発症の新しい疾患概念とされている Femoroacetabular impingement (FAI) について調査したものです。本邦では白蓋形成不全が変形性股関節症の発症原因として考えられていますが、欧米ではこのFAIが新たな疾患概念として注目されています。本研究では弘前大学医学部社会医学講座が主催する岩木健康増進プロジェクトにて撮影された両股関節レントゲン像を解析し、FAIの発生頻度、脊椎アライメントや骨盤傾斜角、またFAIの特徴的画像的所見が実際の臨床症状を惹起するか調査しました。その結果レントゲン所見と臨床症状は相関せず、FAIの特徴的なレントゲン所見は骨盤傾斜に伴う normal anatomic variants であることが推察されました。今後は更に他の因子も検討項目に加え引き続き研究を継続していきたいと考えております。

最後に、本研究を行うにあたり御指導いただきました整形外科科学講座の藤哲教授、石橋恭之准教授、中村吉秀講師、社会医学講座の中路重之教授、梅田孝准教授に感謝申し上げます。なお本研究は文部科学省、厚生労働省の各科学研究費および日本整形外科学会プロジェクト研究の支援を受けました。この場を借りて御礼申し上げます。

## 弘前大学東洋医学研究会の活動の記録と予定

|               |                                         |                                                                                                                                                          |
|---------------|-----------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1. 第1回発足記念講演会 | 2011年7月1日(金)<br>ホテルニューキャッスル             | 特別講演Ⅰ：東洋医学会青森県支部長・アラヤ医院院長 新谷哲一 先生<br>「日本東洋医学会の紹介～支部県部会の紹介～」(座長：元村教授)<br>特別講演Ⅱ：福島県立医科大学・会津医療センター準備室教授 三瀧忠道 先生<br>「総合病院における漢方診療の実践」(座長：東海林教授)              |
| 2. 第一回勉強会     | 2011年8月25日(木)<br>医学部コミュニケーションセンター (MCC) | 講師：東洋医学会青森県支部長・アラヤ医院院長 新谷哲一 先生<br>●漢方の基本事項1 漢方の腹診・診断方法について ●症例提示・症例報告                                                                                    |
| 3. 第2回講演会     | 2011年9月15日(木)<br>医学部コミュニケーションセンター (MCC) | <症例提示> 附属病院 小児外科 准教授 須貝道博 先生<br>「小児排便障害に対する大建中湯の有用性」(座長：元村教授)<br>特別講演：東北大学大学院医学系研究科・先進漢方治療医学講座准教授 武田 卓 先生<br>『産婦人科診療ガイドライン婦人科外来編 2011』からみた漢方治療 (座長：水沼教授) |
| 4. 第二回勉強会     | 2011年11月2日(水)<br>18:30～、MCC             | 講師：東洋医学会青森県支部長・アラヤ医院院長 新谷哲一 先生<br>●漢方の基本事項2 漢方の腹診・診断方法について ●症例提示・症例報告                                                                                    |
| 5. 第三回勉強会     | 2012年1月26日(木)<br>18:30～、MCC             | 講師：東洋医学会青森県支部長・アラヤ医院院長 新谷哲一先生<br>●内科関係疾患の漢方処方の使い方 ●症例提示・症例報告                                                                                             |
| 6. 第3回講演会     | 2012年2月23日(木)<br>18:45～、MCC             | 特別講演：帝京大学医学部外科学准教授／日本大学医学部内科学系統合和漢医薬学分野兼任講師 新見正則 先生<br>『西洋医がすすめる漢方』(座長：袴田教授)                                                                             |
| 7. 第4回講演会     | 2012年3月未予定<br>18:45～、MCC                | 特別講演：日本東洋医学会専門医制度委員会委員長／表参道福澤クリニック 副院長 福澤素子先生<br>演題：未定 (専門医制度について)                                                                                       |
| 8. 第四回勉強会     | 2012年未定<br>MCC                          | 講師：東洋医学会青森県支部長・アラヤ医院院長 新谷哲一先生<br>●外科関係疾患の漢方処方の使い方 ●症例提示・症例報告                                                                                             |
| 9. 第五回勉強会     | 2012年未定<br>MCC                          | 講師：東洋医学会青森県支部長・アラヤ医院院長 新谷哲一先生<br>●その他の疾患の漢方処方の使い方 ●症例提示・症例報告                                                                                             |

二〇〇二年に医学教育にモデルコアカリキュラムが導入され、弘前大学ではそれ以前に単発的に実施していた漢方医学教育を、コマ数を増加する中で寄附講義として整備しました。ところが選択科目として開始したことで、当初から医学科学生の履修率が十%未満という状況に陥りました。直ぐに必修化へ切り替えを計りましたが五年掛りました。この五年間は東洋医学に全く触れない学生を送り出してしまっただけでなく、講義だけの学習でなく体験学習も取り入れ、五年が経過しました。出席率は常に九十%を超えます。講義開始前と十二回の講義終了後にアンケート調査をし、学生の意識の変化を検討しました。同じ質問に対する五年分の調査結果が纏まりました。講義前には東洋医学を如何に胡散臭く非科学的であると感じている学生が多いこと、それが講義後ではきちんと自分で考察できるようになることが一目瞭然です。東洋医学と謂えどEBMが大事であること、

## 弘前大学東洋医学研究会発足 ——空白の五年間を埋めて前進するために——

病態薬理学講座 教授 元村 成

将来に大きな可能性を有していることを、多数の一流の学内外の講師が学生に伝えてくれた結果であると確信致しております。字数とスペースの関係でアンケート結果を紙面に載せることができませんが、興味をお持ちの方は元村(内線五〇一一、Email: moto@c.hirosaki-u.ac.jp)までご連絡下さい。

「空白の五年間」の若手医師にも、どうしたら毛嫌いせず東洋医学に興味を持ってもらえ、この五年間続けてきた東洋医学の卒前教育つまり医学生への講義の成果を、卒後の初期研修を含めた若手医師の東洋医学の研修勉強に繋げることが出来るか、そして学内・附属病院内で東洋医学に興味のある医師を育てていくにはどうしたらよいか、等々がこの度「弘前大学東洋医学研究会」を立ち上げた背景です。沢山の教授に世話人にご就任頂きます。

したが、基本的問題は学内に人が(東洋医学の専門家も含め)少ないことです。弘前大学は全国八十八大学中二校だけの東洋医学会認定の専門医・指導医が不在の教育指定病院でない附属病院です。先ずはこの状況の解消が必須です。そのため教育講演会(既に二回開催、次回は二月二十三日の予定)、東洋医学会青森支部長の新谷哲一先生による勉強会(既に二回実施、次回は一月二十六日)といった受験資格を取り易くする試みを定期的に医学部コミュニケーションセンター(MCC)で始めております(別表参照)。東洋医学に興味をお持ちの方は御参加下さい。その結果、附属病院が研修教育病院になる手助けになればと考えています。少し時間が掛るかもしれませんが、一歩ずつ前進して行くことを念じております。



米山 高弘 先生

## 平成23年度 弘前大学大学院医学研究科 公開講座

麻酔科学講座 教授 廣田 和美

平成二十三年度弘前大学大学院医学研究科公開講座「腎疾患と腎移植」は、九月二日金曜日の午後六時から午後八時まで、医学部コミュニケーションセンターで開催された。附属病院泌尿器科・講師の米山高弘先生による「慢性腎不全の治療法」、医学研究科先進移植再生医学講座・准教授の鳴海俊治先生に

(次ページへ続く)



（前ページより）  
よる「腎移植」および附属  
病院キャリアパス支援セン

ター・助教の藤田 雄先生  
による「腎移植前と腎移  
植後」と題して講演が行  
われ、司会は医学

ていた。講義後のアンケ  
ーの結果を見ても、受講者  
全員が「よく理解できた」  
または「ほぼ理解できた」  
であり、分かりやすい講義  
であったようだ。個々の意  
見でも、「非常に解りやす  
い」「親しみが持てた」「資  
料が見やすかった」などの  
意見が多数あった。以前と  
違って、最近では身近な病  
気である糖尿病に起因する  
腎不全が増えていることか  
ら、受講された方々にとつ  
て身近な話題と捉えていた  
のではと司会をしていて感  
じた。受講者の皆さんは、  
今回の公開講座に満足され  
たようであり、開催した側  
としてはホッとした次第で  
ある。



鳴海 俊治 先生



藤田 雄 先生

七十名であった。講義は、米山先生は泌尿器科医の立場から慢性腎不全の原因から治療に  
関しての説明、鳴海先生は移植外科医としての立場から腎移植手術につ  
いての解説、藤田先生は腎臓内科医の立場から患者さ  
んの変化を交えて腎移植の前後の管  
理の説明や周辺事  
情についての紹介  
があり、どの講義  
も大変分かりやす  
く行われた。講義  
後の質問も数多く  
あり、各講師は分  
かりやすく説明し



## 弘前大学オープンキャンパスが 開催される

入試専門委員長 中 根 明 夫  
（感染生体防御学講座 教授）

八月九日（火）に弘前大  
学オープンキャンパスが開  
催されました。昨年は過去  
最大の四百五十七名という  
参加者数でしたが、今年は  
それを上回り、四百八十  
一名となり、参加者数が更新  
され、うれしい悲鳴を上げ  
ました。

午前十時からプログラム  
が開始しました。まずは佐  
藤敬医学部長から、オー

プンキャンパスへの参加の  
歓迎と弘前大学医学部医学  
科への誘いの挨拶がありま  
した。次に、奥村 謙学務  
委員長から弘前大学医学部  
医学科の特徴ある研究・教  
育についての紹介が行われ  
ました。引き続き袴田健  
一消化器外科講座教授か  
ら「人に優しい外科治療の  
進歩」と題した模擬講義が  
行われました。外科治療の

現場の話から消化器外科領  
域の研究・診療の最新情報  
が紹介され、袴田教授の弁  
舌さわやかな語り口に参加  
者は聴き入っていました。  
その後一転リラックスし  
た「学生コーナー」が始ま  
りました。医学科一年生か  
ら四年生の学生諸君が「学  
生生活楽しみ中」と題し、  
楽しく、かつためになる学  
生生活を語ってもらいまし

た。昼食後、青森県健康福  
祉部から担当の方に来てい  
ただき、「医学修学資金貸  
与制度について」について  
お話しをいただきました。  
引き続き施設見学のプロ  
グラムです。まず参加者全  
員に大講義室で福田幾夫胸  
部心臓血管外科科学講座教授  
と小笠原尚志助手の解説の  
もとに手術ビデオが放映さ  
れました。これは毎年もつ  
とも人気のあるプログラム  
です。生徒達の興味半分か  
ら真剣なまなざしに変わっ  
ていく様



「学生コーナー」は今年  
も学生自治会に協力を求  
め、受付時の誘導、施設見  
学の付き添いも担当しても  
らい、参加した生徒と医学  
科学生のふれあいの時間が  
集まりました。

増しました。最後に、今回  
のオープンキャンパスの準  
備や当日の施行に多大な貢  
献をいただいた先生方、学  
生自治会学生諸君、学務グ  
ループに、深く感謝いたし  
ます。

## ハーバード大学留学体験記

眼科学講座 助教 竹内 侯 雄

平成二十二年九月より、  
アメリカマサチューセツ  
州ボストンのハーバード大  
学にて研究の機会をいた

ております。ここボスト  
ンは、アメリカの東北部に  
位置し、気候は青森・札幌  
に近いです。夏は三十℃を  
越えますが、長くは続か  
ず、十月にもなれば朝は寒  
くなってきます。一月・三  
月は、マイナス十℃近く  
にもなり、ボストンを流れる  
チャールズ・リバーが凍り  
付く程の厳しい冬があり  
ます。

マサチューセツ州は、  
自然の大変ありふれた町で  
もあります。私の住んでい  
るアパートのまわりにも野  
生のリスが住み着いてお  
り、車で少し郊外に出かけ  
ると自然の豊かな、まるで  
「青森？」のようなそんな  
ところ です。

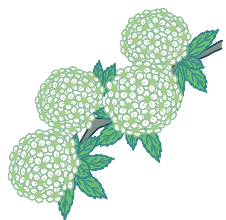
私は、Massachusetts Eye  
and Ear Infirmary (MEI、  
マサチューセツ眼  
耳科病院)、Angiogenesis  
Lab. (Joan Miller 先生と  
Dimitrios Vavvas 先生  
の下で research をしてい  
ます。

こちらの Lab. は、一言  
で言えば、「自主性」が重  
んじられます。最初から指  
示されることはなく、自分  
で必要な試薬を order し、  
実験計画を組み立て、結果  
について lab meeting の  
場所で presentation を行  
います。私は、AMPK と呼  
ばれるタンパクに注目し、  
酸化ストレス下における血  
管内皮細胞・網膜色素上皮  
細胞に注目し、その細胞内

シグナルについて research  
を続けております。  
その結果、現在のところ、  
加齢黄斑変性症・糖尿  
病性網膜症などの眼疾  
患で見られます vascular  
leakage/angiogenesis に A  
MPK が関与しているこ  
とがわかってきました。  
まだまだ研究途中で、わか  
らないことだらけで、調べ  
たいことがたくさんあり  
ます。でもこうした多忙な中  
でも、ラボの明るい雰囲気



Vavvas 先生宅でのホームパーティにて撮った研究室のメンバーの集合写真。向かって  
左端が筆者。中央で浴衣を羽織っているのがボスの Vavvas 先生。研究室には日本人  
も多いのが特徴です。





2 年次

## 「地域医療入門」ワークショップ報告

総合医学教育学講座 教授 加藤 博之

平成二十二年度から始まった二年次の新カリキュラム「地域医療入門」で、授業の一環として行ったワークショップについて報告する。「地域医療入門」では、前期毎週火曜日に講義を行い、県内各地の大小さまざまな診療機関から先生において頂き、本県の地域医療の実情、課題、やりがい、そこで行われている研修や教育などを紹介することを通じて、学生に本県の医療についての理解を深めてもらうことを目的としている。ここでいう「地域医療」とは、小さなコミュニティを基盤とした診療所等の医療のみを指しているものではなく、本県の医療全体を広く、青森の地域医療として捉え、診療所から、広域を準備範囲として高度な医療を提供する大規模な施設までを包含している。従って、講師は、自治医大 O B の方々が赴任しているへき地診療所の所長の先生から、本県救急医療の最後の砦である、本学の高度救命救急センターの浅利教授まで、実に多彩である。科目全体では、大小さ

まざまの診療機関はそれぞれが地域住民にとってかけがえのない医療機関であり、一つひとつの医療機関がそれぞれの役割を果たすことによって、総体として本県の医療を支えていることを学生に理解してほしいと考えている。

四月・七月のひと通りの講義が終了したのち、最終回の授業ではワークショップを行って本科目のまとめを行っている。今年度は七月十二日午前に、医学部会館二階でワークショップを行った。当日は、まず学生を八九名ずつ、十三の小グループに分けた。冒頭で筆者が、本日のテーマは『私の考える地域医療のやりがいと課題』であること

はやりがいや地域住民からの大きな期待があり、実際に各医療機関の医師たちは情熱をもって取り組んでいる反面、医師不足、過重労働など負の側面もあり、行政からの支援や行政との連携も重要であること、それらの調和をいかに取るかが課題となっているとのまとめが多かった。当日は、実際に東通村診療所で地域医療に従事している川原田恒所長にもご参加頂き、学生たちの発表に「地域に対して」という姿勢より、地域とともに」という姿勢が

大切」などのコメントをして頂いた。本科目の対象は二年生であるが、低学年のうちから地域医療に関心を持ち、かつ地域医療を等身大に正しく捉え、自らの進路に重ね合わせて考えてもらうことが重要であると思われる。今後は、このような授業に引き続いて、夏休みなどを活用して、実際に地域医療の現場を見る実習につなげていくことができれば、更に効果的であると考えられる。

る講義二「弘前大学 A O 入試選抜の概要」、そして奥村謙学務委員長による講義三「弘前大学医学部医学科の教育」と順次行われ、最後の講義は遠藤正彦学長による「青森の医学を拓いた人々」と題して講義をしていただきました。研究面では、弘前大学医学部元教授であり文化勲章受賞者の高橋信次先生をはじめ、弘前大学医学部で活躍・業績を挙げられた先生方の紹介がありました。講義の至る所で遠藤学長が考える将来の医療人として期待される人物像について熱く、そして優しく語られました。講義終了後、質疑応答が行われ、本年度の A O 入試スクーリングの日程が終了し、現在 A O 入試本番の真っ最中です。スクーリングの参加者増を反映してか、平成二十四年度 A O 入試の志願者は昨年度より二十名増加しました。

六月九日（木）、A O 入試実施に対し有効な意見交換をするために、青森グランドホテルにおいて、「青森県内高等学校進路指導担当教諭との懇談会」が開催されました。この懇談会も今年で七回目となりました。弘前大学側から、佐藤医学部長、入試専門委員長をはじめ六名、県内高校側は十七校の進路指導担当の先生方が出席しました。佐藤医学部長のあいさつの後、入試専門委員長から平成二十三年の入試結果と平成二十四年度の入試の変更点について説明を行いました。その後、大学と高校間の質疑応答や意見交換が行われ、一時間半の懇談会が終了しました。質疑応答は A O 入試が中心であり、生徒はもちろん、高校関係

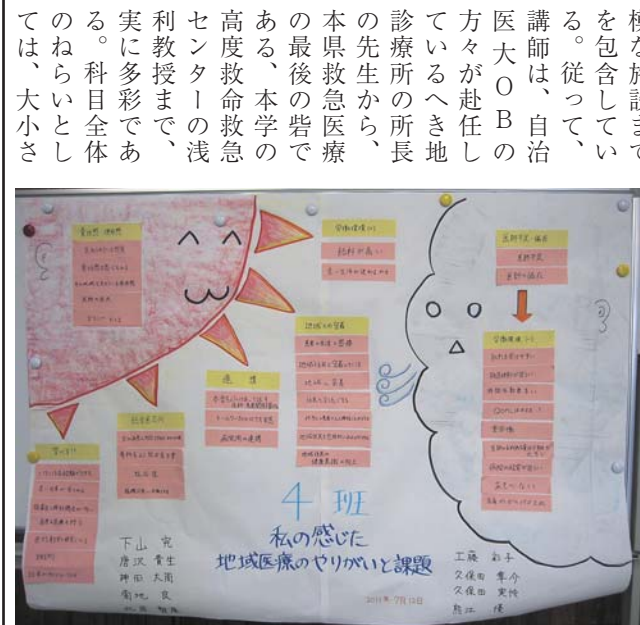


図 ワークショップで学生が作成したプロダクトの一例

から新たにアドミッシン・オフィス入試（A O 入試）が行われ、A O 入試も四年目に入りました。受験生に弘前大学医学部医学科を理解していただく目的で、本年度も二回のスクーリングを実施しました。第一回目は五月二十二日（土）午後一時から三時半まで、臨床大講義室で行いました。高校三年生を中心に生徒百六十二名、保護者・高校教諭二十九名の計百九十一名とこれまで最多の昨年の百四十二名を軽く超え、最多参加者数が更新されました。講義は三コマ組みました。最初に佐藤敬医学部長から講義一「弘前大学医学部の姿勢と将来性」が行われ、弘前大学医学部の概要と医学部学生・医師・医学研究者として求められる人間像

についてお話いただきました。入試専門委員長による講義二「弘前大学 A O 入試選抜の概要及び弘前大学医学部医学科の教育の概要」では A O 入試の資格、選抜方法、医学教育六年間について話しました。さらに花田勝美附属病院長による講義三「躍進を続ける弘前大学医学部附属病院」では、花田病院長の軽妙な語り口で附属病院のすばらしさを語り、参加者はいずれの講義も熱心に聴き入っていました。

第二回目のスクーリングは八月十日（水）に行われました。昨年と同様前日にオープンキャンパスが開催されたためか、今回の参加者は減少したものの、生徒四十五名、保護者・高校教

諭十六名の計六十一名が参加し、昨年の四十四名を超え、第二回目スクーリングとしては、過去最高の参加人数でした。今回の講義は四コマ組みました。佐藤敬医学部長から講義一「弘前大学医学部の姿勢と将来性」、入試専門委員長によ

加し、昨年の四十四名を超え、第二回目スクーリングとしては、過去最高の参加人数でした。今回の講義は四コマ組みました。佐藤敬医学部長から講義一「弘前大学医学部の姿勢と将来性」、入試専門委員長によ

者や保護者もきわめて高い関心を寄せていることを改めて実感しました。最後に、二回のスクーリングの準備や当日の施行に多大な貢献をいただいた先生方および学務グループに深く感謝いたします。

### 平成23年 医学研究科公開講座

## 「健康・医療講演会」

分子生体防御学講座 教授 伊 東 健

きました。また、更年期障害の一要因であるエストロゲンの低下が様々な疾患の原因となること、さらにはホルモン補充療法についての解説がありました。横山先生からは骨折の原因となる骨粗鬆症の治療および予防法についてご講演いただき、予防については主に運動や食事との関連からお話いただきました。骨粗鬆症の予防には運動習慣が重要であることを誰もが認識して帰路についてであろうと思われました。講演の後には活発な質疑があり、両先生が丁寧に質問に答えられていたのが印象的でした。

秋の行楽シーズンの最中ではありましたが、小春日和の天候に恵まれ九十五名の方に参加していただきました。本講演会にこころよく協力いただいた大館市立総合病院長の館岡博先生をはじめとした関係各位に深謝いたします。



入試専門委員長 中 根 明 夫  
(感染生体防御学講座 教授)



水沼 英樹 先生



横山 徹 先生



## 研究室紹介

## 脳神経内科学講座

脳神経内科学講座 教授 東海林 幹夫

脳神経内科学講座は平成十八年に発足し、今年で六年目を迎えます。本格的な臨床神経学の教育と診療システムの確立・普及と神経変性疾患のバイオマーカーと根本的治療法の開発を教室のテーマとして、教職員と歩んで来ました。最近では全国的にも弘前大学神経

内科の存在が確固たるものとなっています。診療面では外来、病棟ともに呼吸管理を要する重症例から希な変性疾患まで幅広い診療を行っています。青森県では神経内科専門医がまだまだ少なく、難しい神経内科疾患は大学に集中するため、患者さんの

最後の砦としての役割を果たしています。当科で開始した物忘れ外来は実に七百例を突破し、バイオマーカーや画像を用いた診断やJADNへの参加や臨床第一相試験の実施など全国的にも先端の取り組みをしており、二〇一〇年度弘前大学診療奨励賞に選ばれました。

教育面では全国レベルの教育コンテンツの作成と講義、実習に時間を注ぎ、お陰様で各地の卒後研修施設からは神経疾患を十分診察できるようになっているとのお褒めをいただいておりますが、まだまだ後期研修医が大学に残らないのが大変な所です。

さて、研究面では現在アルツハイマー病の原因として注目されているAβ oligomerに関する新たな発見を報告することができました。抗Aβ oligomerモノクローナル抗体の作成を開始してから実に八年が経っています。松原悦朗准教授、高村歩美博士は一貫して努力され、Aβ oligomerがアルツハイマー病の最も重要な原因分子であること、ELISAによる測定がバイオマーカーとして有用であること、開発したAβ oligomer抗体がアルツハイマー病の予防に有効であることを示しました。これら

の成果は、現在、前臨床試験として進展しつつあり、日本発の根本的治療法として大変期待されています。

現在のメンバーは、私と松原悦朗准教授、瓦林毅講師、若佐谷保仁助教と仲田崇助手、大学院生、研修医、中畑直子言語聴覚士、高村歩美、大野英人特任研究員、葛西祐代、成田早希子の二人の秘書、佐藤由紀、佐藤薫、飯沼要の三人の研究助手さんです。皆さんとともに今後の弘前大学神経内科の発展を望んでいます。

は講義・実習を通して学んだ知識・技術を地域社会に還元する役割を持つ」という理念の下、青森県民の健康増進を目標に医学生有志によって行われる医学科最上級のイベントです。今年も昨年と同様、社会医学、精神医学、臓器展示、治療手技、産婦人科、救急医学の六つのブースを設けました。

社会医学ブースでは、社会医学講座のご協力の下、四肢血圧、骨密度を測定しました。「毎年来てくれる」や「去年は〇〇さんに良くして頂いた」といったリピーターのお客さんの多さに驚かされました。地域の方々の健康に役立ててもらえているのだと改めて感じました。

## 医学展2011を振り返って

弘藍尊 貴 木馬山 鈴相丸 代表： 副代表： 医学科4年

今年も十月二十一日（金）から十月二十三日（日）までの三日間、学生総勢七十名で「医学展」を開催させていただきました。総合文化祭における医学展の位置づけは、年を追うごとに大きいものとなってきました。実際、今回の来場者数は過去最高の千六百人以上にもなり、総合文化祭の中でも存在感がある団体の一つと言えます。

医学展とは、「我々学生

精神医学ブースでは、神経精神医学講座のご協力の下、感情の浮き沈みのチェック（POMS）、性格チェック（TEG）を行いました。老若男女問わず、大勢の方々に足を運んでいただきました。結果を見るなり「おお！当たってるかも!!」「うそ!?意外！」など、さまざまな反応が聞こえてきて大変楽しんでいたように思います。

臓器展示ブースでは、生体構造医科学講座、病理生命科学講座、脳神経病理学講座のご協力の下、様々な正常臓器・組織、病理標本をお借りして展示しました。スタッフの説明も交えながら、めったに見ることのできない臓器・標本を、我々学生以上に観察して勉強されている方もおられました。

治療手技ブースでは、消化器外科学講座のご協力の下、腹腔鏡下手術体験、外



座のご協力の下、妊娠体験、胎児エコー、乳がん自己検診教室を行いました。「妊娠体験できてよかった」との意見が、特に男性から多かったのです。さらに、「サポートが必要だと思った」という感想ももらえたので体験していただけてよかったと思います。乳がん検診についても好評で、しこりの感覚を一生懸命覚え

科結び体験、外科器具展示を行いました。実際に手で触れて体験できるということもあって、家族連れや学生の方々を中心に来ていただけました。夢中になって十分以上も腹腔鏡の前から離れない方も多く、お客さんに満足していただけた展示になったと思います。外科結びはまだ小さいお子さんにも体験していただけて、見よう見まねで頑張っている姿がかわいらしく思えました。

産婦人科ブースでは、産婦人科学講



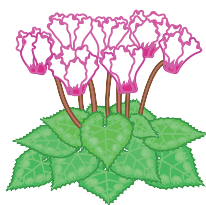
ていました。救急医学ブースでは、救急・災害医学講座のご協力の下、胸骨圧迫・AEDなど救命体験を行いました。幅広い年齢層のお客さんに来ていただき、その中でも女性のお客さんが多かったように感じました。「もしお

ばあちゃんか：」「もし夫が：」とおっしゃっていた方も見られ、「もしも」のために頑張って練習していました。

また、今年も「知の創造」との共同企画を行い、脳神経病理学講座教授の若林先生には「脳卒中を知る」、救急・災害医学講座教授の浅利先生には「大震災時の災害医療」という演題で講演していただきました。

若林先生のお話では、発症予防のためにとメモを取る高齢の方が多く見受けられ、熱心に勉強されていた。浅利先生のお話では、被災現場の写真や臨場感のあるお話に、来場者全員が食いつくように聞き入っていました。両教授の講演会はどちらもタイムリーな話題であり、活発な質疑応答が行われ、来場者の方々の関心の高さが伺われました。

最後になりますが、開催日時はほんの三日間ではありましたが、準備期間も含めると数カ月間活動が続けることとなり、スタッフの人数が多くはない中でもこれだけ充実したものを作り遂げることができました。これはスタッフ全員の力だけではなく、各講座の先生方、鵬桜会の皆様、事務の方々のご協力あつてのものです。医学展開催にご協力していただきまして本当にありがとうございました。心から御礼申し上げます。





## テネシー大学での研修を 報告します

医学科五年 柴田 俊

テネシー大学への実習研修を大変有意義で貴重な体験にして頂いた袴田教授、総務の木村さん、選考委員の方々、テネシー大学の Mr.Shreve、Ms.Bland、滞在先の Creek 夫妻に感謝申し上げます。Creek 夫妻の自宅にホームステイし大学の医療施設に通いました。この夫妻は私と同世代の医学生でありながら、様々な国からの留学生の Host Family になるなど、懐の深さを感じました。

八月二十二、二十三日に Family Medicine のある St.Francis を訪れました。妊娠、乳幼児健診など産婦人科、小児科関連の患者が散見されました。高齢者の定期健診、小児疾患のフォローアップ、糖尿病、高血圧などの長期的な患者のサポートや胸痛、足痛などの患者の外来もあり、アメリカの家庭医の取扱い領域の広さに驚きました。二十四、二十五日は Trauma Surgery のため Elvis Presley Memorial Trauma Center を訪れま



Autozone\_Park で野球観戦した時の写真

した。銃・暴力外傷、交通事故、麻薬関連が主なものでした。窓ガラスで怪我を負った患者の尺骨動脈・尺骨神経再建や銃弾で負傷を負った消化器を damage control 目的で切断した後、後日消化器をつなげる吻合術を見学しました。二十六、二十九日は Transplant Surgery のため Methodist Le Bonheur HealthCare を訪れました。三十、三十一日は High-Risk Obstetrics を扱う Rout Center を訪れました。糖尿病、高血圧などを合併した分娩、帝王切開を数件見学しました。妊娠中で失神を起こした患者、生殖器から出血した患者などの急患もありました。九月一、二日は St. Jude Children's Research Hospital を訪れました。Hematological Malignancy Group と Infection Control Team (ICT) で働く二人の日本人医師に指導を受けました。白血病患者の回診や ICT が他科と抗菌薬の使用について行ったディスカッションに陪席しました。二人の医師は卒後九年目、三年目に渡米してきた方々です。渡米時の苦労話やアメリカの医療について話を伺い、大変参考になりました。

二週間という短い研修のため周囲の環境に慣れるのが精一杯で、アメリカの医療を学んだというより垣間見たというのが実感です。弘前大学には国際的に活躍されている先生もいらっしやいますし、インター

## テネシー大学での実習レポート

医学科五年 齋木 琢郎

八月下旬の二週間、メンフィスの汗ばむ陽気の中、University of Tennessee Health Science Center で行った実習について報告します。

外国の医療というと、日本とまったく異なるスタイルがあるようにも思われる一方で、いや、勉強している内容が違っているはずがないという気もしてよくわからないので、その実際のところを見てみたいと思います、今回の実習に参加しました。いや、ただ外国に行きたかっただけかもしれせん。

実習は科ごとに大学周辺の病院で行い、家庭医学、外傷センター、血液内科、そして小児悪性腫瘍の臨床と研究で世界的に有名な



ネットを使えば国際レベルの医療水準を知ることできます。医療の世界にもグローバル化の波が押し寄せてきています。日本で学べることが日本ですっかり学びアメリカに再び行き挑戦してみたいと思います。

鎌状赤血球症の専門病棟など、日本ではなかなかできない経験を得ることができました。

留学だより

テネシー大学及び三沢空軍病院への学生派遣

St. Jude hospital を見学しました。とくに、レベル 1 (最高次) の外傷センターと血液内科を見学した (The MED) という病院は、治療費すべてが税金で賄われているために貧困層が来院しやすい、銃による外傷やドラッグ常習者、アフリカ系アメリカ人に多いとされる

## MISAWA

医学科五年 平山 陽士

今夏は、私以外に五名の学生が三沢で研修をし、その事について報告することになっている。私以外の五名は、優秀で真面目で人間性にあふれ、英語の能力も秀でている。私が真面目に書いたところで、彼らの報告の眩さゆえに、反って惨めな思いをすることになる。故に、彼らとは別な視点からお伝えしてみようと思う。

三沢研修を申し込んだ理由は英語が重要である、米国の医学に興味があるというありふれた理由の他、面接では言わなかったもっと単純な理由がある。英語が使えると人生が楽しい。ただ、それだけである。旅先では色々な情報に触れられるし、大抵英語が出来るとう

分ですまず診察して所見や必要な処置をまとめ、朝のカンファレンス↓レジデントとのプレラウンド↓教授とのラウンドと、その間常にディスカッションを交わしつつけるなど、自分の持っているものをアウトプットする機会が豊富にあることが印象的でした。宿泊については先方の大

イメージでとらえられがちな「競争」のポジティブな作用を見た気がしました。最後にになりましたが、今回の実習をサポートしてくださった、袴田教授をはじめとする先生方、総務グループの木村さんに改めて感謝の意を表したいと思

います。もっと勉強してしっかり働ける人間になりたいと思いました。ありがとうございました。

れば高いほど、米国医学について学ぶ比率は大きくなる。残念ながら、私の英語レベルでは、診察室での会話は早すぎて、また高度な質問をする事もできなかった。米国医学を垣間見た程度の研修となったが、非常に有意義であった事だけは強調しておきたい。ともあれ浅ましい話で申し訳ないが、若かりし頃に N Z に語学研修に行くために計画的に家賃を滞納した事を思うと、三沢研修は僥倖であっ

た。三沢での失敗談の一つ。しばらくの間スポンサーの家でボディーソープのボトルを間違えて使っていた。ある日スポンサーが「Youji Which bottle do you use?」と聞くので、この緑のボトルだと答えると、それは大用であった。「Wow, Do you have lice?」(シラミがあるのか?)と笑われたが、決してそういうわけではない。閑話休題、私のスポンサーは基地で勤務している

七月二十一日〜八月三日までの二週間、三沢米軍基地病院での研修に参加させていただきました。私はこのプログラムの存在を知ってからずっと、この研修に参加したいと思っていました。理由は二つ。一つ目は、外国の人と英語を話す生活をしてみたかったから、もう一つは、家庭医に興味があり、アメリカの Family Practice を見てみたかったからです。

## 三沢での実習生活を振り返って

医学科五年 伊藤 晶子



三沢での二週間、私はホストファミリーの Cappelutti さんの家に滞在させていただきました。Cappelutti さんは産婦人科の看護師であり、産婦人科領域の興味深い話を聞いた時、時にはお互いの趣味の映画の話で盛り上がりたりしました。病院では Family Practice、UCC (救急)、産婦人科、小児科、整形外科、内視鏡を見学させていただきました。BSL とは違い、Common Disease の患者さんばかり。Family practice では内科から整形外科、精神科、皮膚科領域まで問診と診察を行っており、その知識の幅広さに驚きました。看護師や Physician Assistant も

患者を診察しており、アメリカの医療はより「チーム医療」を行っているという印象を受けました。また、院内のスタッフ同士も仲が良く印象を受けました。病院以外での生活では、日本に居ながらもアメリカ生活を満喫していました。食事はほぼ毎日ピザかハンバーガー! 休日は映画を見たり仲のいい家族とご飯を食べたり、ダーツをしたり、毎日が充実していました。

この紙面ではほんの少ししか語れませんが、二週間三沢で過ごし、本当に貴重な経験をさせていただきました。私は海外留学も英会話教室の経験もなかったため、英語に全く自信がなく、始めは二週間も三沢でやっていけるのかという不安でいっぱいでした。でもみんながとても気さくで、私の拙い英語でも熱心に耳を傾けてくださり、不安はいつしか消え、大変ではあったけれど英語での会話が楽しい!と感じ、医学だけではなく皆さんの

(次ページへ続く)



(前ページより)  
ことを学んで帰ってきた、  
そんな感じがします。  
最後に、このような機会  
を与えてくださった先生

## 後輩の皆さんへ

医学科五年 小 泉 亜耶子

「案ずるより産むが易  
し」。良くいわれる言葉で  
すが、まさにその通りで  
す。ホームステイしてみ  
たと思ったことはこれま  
で何度もありましたが、英  
語力への不安が邪魔して最  
初の一步を踏み出す事がで  
きずにいました。今回思い  
切って空軍病院での実習に  
挑戦した訳ですが、三沢に  
行く直前は不安でいっぱい  
でした。しかし行ってみ  
れば何とかなるものです。  
初めの頃は英語が聞き取れ  
ず、てきとうに「うーん：  
yes..」を連発し過ぎて食  
事の約束をダブルブッキン  
グして焦った、など失敗談  
もあるのですが、数日たつ  
と耳が英語に慣れたのか、  
周りが私(の未熟な英語)



に慣れたのか、たどたどし  
いながらも実習や会話を楽  
しむ事ができました。その  
中で前々より聞いてみた

方、二週間一緒に過ごした  
Cappelluti さん、三沢米軍  
基地病院のスタッフのみな  
さん、関係者のみなさんに  
深く感謝いたします。

はやる気に満ちあふれてい  
る、何でも積極的にやっ  
て「一」とのこと、今後  
の自分の姿勢にも反映さ  
せたい所です。実習以外に  
もホームパーティーにお呼  
ばれされたりし、様々な人  
種・文化の人と交流する楽  
しみも知りました。そして  
言葉に不自由する自分を悔  
しく思い、もっと英語を勉  
強したいと心の底から思い  
ました。

特別な勉強をした訳でも  
なく、英語力は大学入試以  
降没落の一途を辿っていた  
私ですが、そんな私でも空  
軍病院で多くのものを得る  
事ができました。後輩の中  
でテネシー大学や三沢空軍  
病院での実習に興味がある  
方々には、迷わず応募すべ  
きだと言いたいです。迷っ  
ているだけでは何も始まり  
ませんが、ちよつと勇気を  
出すだけで大きなものが得  
られます。ぜひ挑戦してみ  
てください。

米国では学生にも様々な  
手技を経験させてくれるよ  
うで、私も普段の実習以上  
に診療に参加させていた  
きました。「米国の医学生

## 三沢のすゝめ

医学科五年 町 田 純 帆

平成二十三年八月十二日  
二十一日に三沢空軍病院  
で実習させていただき、紙  
面に書ききれませんがす  
っかり満喫してきました。最  
初からすんなりいったわけ  
ではありません。滞在させ  
ていただいたのはパワフル  
な黒人女性 Tonya のお宅。  
African American women  
は予想以上にテンションが  
高く、笑い転げて途切れ  
ことなく話すため、笑って  
乗り切ったことも多々あ  
りました。しかしみんな  
friendly、男性は gentleman  
で、知り合いが増えるにつ

れて自分の居場所を見つ  
け、どんどん楽しくなっ  
ていきました。自分で作っ  
た名札を白衣に貼り、誰に  
も Nice to meet you. から始  
めました。日本人と違い、  
あらゆるところで Hi!! と  
hug する姿が印象的で、  
当たり前にあいさつをする  
環境の素晴らしさを感じま  
した。

希望する科は適宜取り  
計らってもらい、Labor  
& Delivery, OB/GYN,  
Pediatrics, UCC, Family  
Medicine, Surgery Service  
を見学しました。私は三沢



で初めてお産を見学し、ア  
メリカでは無痛分娩が主流  
であること、入院期間が短  
いことを知りました。個人  
主義なので病室はちよつと  
したホテルのようで夫婦で  
一室、旦那さんも泊って分  
娩に立ち会い臍帯を切っ  
たのには驚きました。そ  
して英語でのプレゼン(五  
分程度)テーマは「日米の  
出産に関する相違点」を選  
びました。他にも、軍の階  
級や基地の医療費の話、  
アフガン派遣の話、ちよ  
つとおかしな制度、日本と  
アメリカで医者になる違い  
なども聞いたり、軍ならではの  
非常時訓練も見られまし  
た。

病院外では、LIVE、  
三沢祭り、教会、買い物、  
Zumba というダンスエク  
ササイズなどを楽しみまし  
た。友人家族のお宅では頻  
繁に友達が食事やおしゃべ  
りに来て、プライベートで  
の付き合いもとても充実し  
ていました。

米軍基地という特殊な環  
境での医療や人々の生活に  
触れて、国際文化や医療に  
対する視野や今後のモチ  
ベーションが大きくなった  
ような気がします。温かく  
素敵なみなさんに本当によ  
くしてもらい、非常に貴重  
な体験となりました。少し

## 三沢放浪記

医学科五年 篠 原 良 仁

五年生になり、久々に  
夏休みらしい夏休みを  
手にいれた私は、弘大の  
Externship 制度を知り、  
三沢空軍基地内で生活さ  
れている Bruja 夫妻と二人  
の Bruja boys の家に八月  
二十二日から九月四日まで  
の二週間、居候させていた  
だいた。

子供達は四歳児と八歳の  
二人だったが、英語を少し  
も勉強しなかった結果、初  
めは子供達の英語が分から  
なかった。日本人に対し、  
大人は分かりやすく話して  
くれるが、子供は容赦がな  
い。私の三沢での二週間は  
毎日分からない英語の意味  
や言い回しを尋ね、暇さえ



でも興味がある人は英語に  
自信がなくても、ぜひチャ  
レンジして下さい。毎年  
十二月の医学部ウォーカー  
を読んでみると面白いです  
よ。三沢での実習の機会を  
与えてくださった先生方や  
事務の方々、Misawa AB  
の方々に深く感謝いたしま  
す。ありがとうございまし

あればスタッフのオフィス  
に雑談しに行き、寝る前は  
その日学んだ英語の復習を  
する日々だった。だから、  
四六時中、英語について考  
え続けていたので、非常に  
疲労した。

それでも、三沢デイズは  
とても楽しく、新鮮味あふ  
れる日々であった。二週間  
の滞在の間で party が五回  
あり、平日はホームパ  
ーティ、休日は基地の外に連  
れて行ってもらい、病院の  
スタッフとダーツやビリ  
ヤードを楽しみ、朝まで飲  
み明かした。ご主人が太り  
気味の様で、普段は肉類を  
控えているようだが、私の  
滞在中はアメリカの家庭料  
理や、自慢のグリルを駆使  
した料理を振舞ってくれ  
た。また、Bruja 家の主人

## 三沢空軍病院にて

医学科五年 黒 川 貴 司

七月二十四日(八月五日  
の二週間、米軍三沢基地に  
ある空軍病院で実習してき  
ました。最初の二週間は U  
CC (urgent care clinic、  
救急部)で、次の一週間は  
小児科でお世話になりました。  
実習では、アメリカの  
病院の雰囲気や垣間見るこ  
とができました。日本の病  
院と比較して特に違うと感  
じたのは、外来に来た患者  
さんが診察室に入ってくる  
のではなく医師が患者さん  
の部屋へ足を運んで診療す  
ること、医師・看護師など

の職業は主夫であったが、  
家事はホームヘルパーがし  
てくれるので、毎朝八時に  
起きて子供達を学校に連れ  
て行くことぐらいだった。  
羨ましい米国生活である。  
病院実習ではほぼ全ての科  
を見学した。日本の病院と  
異なる点は、病棟というよ  
りもオフィスがいくつも  
あった。また、患者の大ま  
かな病歴は看護師、テク  
ニシャンが行っていた。  
そして、業務中も飲食 OK  
であった。そもそも院内  
に冷蔵庫がある。疾患は  
common disease ばかりで  
あった。

私は Bruja 家族の素晴ら  
しい hospitality のおかげ  
で、体重が 5kg 増加し、現  
在もダイエットに励んでい  
る。  
最後になりましたが、企  
画・運営を下さった先  
生方、Bruja 家の方々、三  
沢空軍基地の方々、本当に  
ありがとうございました。

職種間での連携が良く、ス  
タッフ間の距離がとても近  
く感じたこと、などです。  
また、朝がとても早いわ  
りに夕方になるとみな帰宅  
して家族との時間を過ごし  
たり、一週間の勤務表を見  
せてもらうと身体に負担の  
かからないスケジュールに  
なっていたり、と勤務体制  
に羨ましさを感じました。  
逆に、患者さんの診断や治  
療の場面で、医学は世界共  
通なんだということを、あ  
らためて実感しました。  
それと、これから三沢に



お礼申し上げます。  
最後に、このような機会  
を与えてくださった弘前大  
学の先生方、学務の方々、  
受け入れ先の三沢基地の  
方々、ホストファミリーの  
方々、本当にありがとうございました。  
この場を借りて  
お礼申し上げます。



# 編集後記

「なでしこジャパン」が流行語大賞に選出された。彼女たちには失礼な言い方かもしれないが、撫子の花の持つ可憐で嫺（たおやか）なイメージと形振り構わずフィールドを駆け巡る勇姿とのギャップに命名者のウィットを感じた方も多いだろう。

二〇一一年日本は大きな困難に直面した。これほど多くの涙を流した年を私は知らない。そんな先の見えないうち、大和撫子は日本中に大きな元氣と勇氣を与えてくれた。金色の紙吹雪の中、優勝カップを高らかに掲げる選手たちの笑顔に溢れた一枚の写真。永久保存版である。

二〇一一年世界も激動した。アラブの春、ヨーロッパ全体の金融危機、中国の台頭。そしてTrans-Pacific Partnership。国内では不安定な政治。二〇一二年はさらに不確実性が増しそうだ。

二〇一二年弘前大学、医学研究科、附属病院も新しい体制になる。多くの教授も進められている。国際的評価基準に耐えうる医学教育、世界水準の研究の推進と研究費の獲得、地域医療の堅持と高次医療の提供、高度先進医療の開発・推進、など少ない人材の中で進めるには酷なほどの課題が山積している。さらに労務管理に関する問題も。困難な状況下では「なでしこ」の力を借りたいくらいだ。ちなみに撫子の花言葉には「大胆、快活」もなるほど「なでしこジャパン」である。

二〇一二年が皆様にとって良き年になりますように。（袴田）